

## 小杉天外『魔風恋風』をめぐるメディア的トポス

馬場伸彦

### はじめに

小杉天外の『魔風恋風』に関する論考は、明治期ベストセラー大衆小説としての問題と作中人物である「女学生」の問題という、概ね二つの側面からなされてきた。たとえば、前者は、作品の分析と共に、なぜ絶大な人気を獲得したのかという流行現象の要因が問われ、後者は、そこに表象された女学生を取り囲む社会とは何であったのかが問われることになる。いずれの場合も、作品を自律したテキストとみなし、創作者としての作者の存在を措定した上で、作品論的、内容分析的アプローチが試みられる。しかし、新聞小説をひとつの「文学」ジャンルとして取り上げてきた従来の分析方法ならびに枠組みに拘泥すれば、この小説における本質を見誤る危険性があるのではないか。留意しなければならないのは、『魔風恋風』が新聞小説であるというテキストの性格である。言うまでもなく、それは新聞という日々更新されるメディアにおいて生成するものである。新聞小説がレイアウトされた紙面には様々な記事が取り囲んでおり、また記事とは一見無関係に思われる「広告」という情報が、そこでは併載されているのだ。したがって、読者は、まず、一覽的に新聞を「見る」のであり、そして、興味をひいた見出しや挿絵に誘われて、新聞小説へと分け入っていく。こうしたモザイク状の紙面において展開されたのが、『魔風恋風』という新聞小説の生成のトポスなのである。

また、新聞小説は連載という形式を採るのが普通であり、小説欄というある程度区別された囲いの中には、題名、章題、回数、作者名、そして挿絵画家の名前が並

び記されている。小説本文は、四百字詰め原稿用紙で概ね三枚弱であり、そこに挿絵が添えられて、二段組みあるいは一段組で掲載される。刊本とは異なった、こうした新聞小説の形式上の特長は、読者の受容態度にも影響を与え、「外部」的な要因が入り込みやすい状態をつくり出している。読者が新聞小説に接するときの環境は、常に何か別の情報に触れながら「読む」ということが条件づけられ、それは書物（刊本）を読むという自閉した行為とは別の読書行為となる。言い換えれば、新聞小説は、内容的にも構造的にも不完全な小説として日々読み直されていく、開かれた「小説」といえるだろう。

このような新聞小説をめぐるトポスは、他メディアによって流布される言説や読者投稿欄に寄せられる声との結びつきを容易にする。読者は、読者自身が見聞きした情報を基に、読者投稿欄を媒介にして積極的に小説内部への参入を試み、また読者同士が新聞というメディアを媒介にした想像の共同体を形成していく。マクルーハンの言葉を借りるなら、モザイク状に配置される新聞の形態上の特長は、「内幕話（インサイドストーリー）」の効果を生み出しているのである<sup>1)</sup>。

作者によって物語の完結が与えられ、連載が終了した場合でも、関心を持ち続ける能動的な読者の参与によって、新たな言説空間、いわば「ポスト魔風恋風」の補助線がいくつも引かれることになる。たとえば、小説連載真っ直中の明治三十四年三十六年五月十五日より始まった新コーナー「当世百人娘」(図⑦)や連載終了後の明治四十年二月十四日から開始された「都下女学校風聞記」などは、そうした能動的な読者の参与を示す一例であり、これらもまた「内幕話」なのである。また、その意味でいえば、明治四十年に発表された田山花袋『蒲団』、それに続く『少女

病」などの小説も、読者と作者の「内幕話」を共有した「ポスト魔風恋風」と捉えて差し支えないだろう。

本稿は、『魔風恋風』を自律した作品として扱うのではなく、明治末期におけるメディア表象として捉えることを議論の出発点とするものであり、掲載媒体である『読売新聞』を取り囲む大衆消費社会のコンテクストの中に、テクストを再布置し、その「内部」と「外部」との往還関係の検討を試みることを目的としている。

### 一 自転車

明治四十一年、二年頃に大流行した流行歌「ハイカラ節(自転車節)」には、当時の女学生の様子が次のように歌われている。

ゴールド眼鏡のハイカラは

都の西の目白台

女子大学の女学生

片手にバイロン・ゲートの詩

口には唱える自然主義

早稲田の稲穂がサーラサラ

魔風恋風そよそよと

歌詞に登場する「魔風恋風」とは小杉天外の『魔風恋風』を指している。この小説は、『読売新聞』の新聞小説を初出とし、連載期間は明治三十六年二月十五日、九月十六日であった。掲載と同時に絶大な人気を獲得し、新聞読者という限定を越えて、その後の女学生ブームの一要因になったさえいわれている。

小説は連載終了後の明治三十六年十一月、梶田半古による自転車に乗った主人公の扉絵が添えられ単行本化されて、さらに明治三十八年三月には東京座で劇化され、その人気に拍車をかけた。

この「ハイカラ節」は別題を「自転車節」といい、「自転車」ブームを背景にヒ

ットしたというもうひとつのコンテクストを抱えている。『魔風恋風』の連載当時、自転車は実用的な交通手段というよりも高価なステータスシンボルであった。小説のヒロイン初野を自転車にのらせるという造型は、明治三十三年に日本最初のオペラ歌手である三浦環が上野の音楽学校まで自転車に乗って通学したエピソードに基づいているようだが、女学生が自転車にのる姿はまだまだ一般的ではなかった時期に書かれたことは留意してもよい。すわわち、『魔風恋風』は、時代の流行を先取りするトレンドイ小説として話題を呼んだとも考えられる(図③)。

海老茶袴の女学生の自転車姿が皆無であったかといえそうではなく、たとえば森銑二『明治東京逸聞史』(東洋文庫)の明治三十四年の記述には「春の日自転車と並んで行くのを見た」という『中央公論』の記事が紹介されている。そこには「卑屈を優美と心得るような考えを、根本からぶっ壊したい」と、女子が自転車に乗ることが活発な機運として肯定的に捉えられている。女子と自転車という組み合わせが意外なのであり、同時に新しい時代の息吹を象徴していたのだ。「ハイカラ節」は、そんな社会現象ともいべき流れを受けて流行歌となったのである。

作者の小杉天外には、既に、『初姿』(明治三十三年 春陽堂)、『はやり唄』(明治三十五年 同)などのいわゆる自然主義の作品があり、ある程度は知られた作家であった。しかし人気作家の仲間入りを果たすのはこの作品以降であり、この作品を契機として尾崎紅葉に継ぐ新たな「通俗文学」の担い手として持て囃されるようになった。その意味で天外にとって『魔風恋風』は自然主義作家から「通俗小説」への分岐点となった作品といえよう。

女学生を主人公にし、その生活と彼女らを取り囲む社会環境を描こうとする彼の創意は、高等女学校が急増した社会背景に重ね合わせてみると、作家の創作意欲から生まれた小説というよりも、むしろ衆目を集めることを狙った、戦略的な小説であったように思われる。単行本の序において天外は次のように述べている。

作中の主人公と二三の主なる人物とは、曾て世に在つた人、それから今現在に在る人をモデルにしたのだ。とりわけ主人公とは五六回も面を会はしたことがある、全く美人で、学才も秀でて、男に騒がれた事は中々爰に描いたやう

なものでは無かった。(中略) この作は、世の所謂婦人問題、女学生問題に意を用いる人にも多少の利益を與(あた)ふるものと信ずる。<sup>(2)</sup>

ここには事実と小説が相似であることが述べられ、その境界を融解させようとする天外の創作意図が見受けられる。主人公の实在性を強調することにより、読者の好奇心を虚構の世界へ接続させようと目論むのである。

天外はこれを「写実小説」と称している。つまり、事実に基づいた、いわばドキュメンタリー的な小説というわけである。読者の側もまた、実在するモデルが誰であるのかを詮索することによって、現実と虚構の区別を不問とし、墮落や淫蕩性をスキヤングダラスに報じる三面記事に、身近な空間にいる女学生の姿に主人公のイメージを重ねていったのである。こうして主人公の女学生は虚構の世界から呼び出され、現実の出来事と地続きの対象へと意味づけられていくわけであるが、また同時に、虚構の世界の女学生に対する欲望が、現実の女学生に対する欲望へと結びつく回路ができあがるのである。

## 二 墮落女学生

前述の「序」における「女学生問題に意を用いる人にも多少の利益を興ふる」という部分に注目してみたい。天外がいう「女学生問題」とは何を意味しているのだろうか。

本田和子は、明治末期の女学生は、「紙に揺れるリボンや足もとに翻る海老茶袴によって、また陽光にきらめく自転車銀輪やその軽快なベルの音において、近代都市を代表する「記号」となり、さらには、漸くに近代国家として安定期を迎えた、「明治」という時代の象徴でもあった」という。そして、「彼女たちは、和洋いづれの伝統にも依拠せず、正当性を認められたまともな女性文化を無化すること、<sup>(3)</sup>「異化するもの」としてそのありようを誇示して、そのことを通じて、新しい時代の表徴としての位置を与えられていた」と述べている。実際のところ、多様な人々が同乗する電車の中においてさえ、あるいは博覧会(『風俗画報』第三百六十

五号増刊「東京勸業博覧会 第四編」明治四十年六月二十五日)などの祝祭空間の群集の中でさえ、「女学生」を発見することは容易なことであった(図①)。なぜなら、「ハイカラソング」の歌詞をみても分かるように、そこには、「自転車」「ゴールド眼鏡」「バイロン・ゲートの詩」「バイオリン」といった女学生的なる記号によって、「女学生」とそうでない者を区別することが常に可能だからだ。たとえば、明治三十七年一月一日『風俗画報』第二百八十一号には、「女百姿女流ハイカラ」と題して、自転車のゴールドメガネを掛けた女学生の風刺画が描かれており、女学生イメージがステレオタイプ化していることが確認できる(図②)。

女学生とは、いわば、明治末期の都市空間に出現した他者であり、明治的価値観を揺さぶるノイズであった。女学生の際立った異形性は、「高等女学校令」(明治三十二年二月)の「良妻賢母」という封建的価値観を志向しつつも、風俗レベルにおいては西欧的近代性や自由を表徴する時代のアイコンであった。巨大なスカートのごとき女袴に矢絛の着物、庇髪にリボン、そして足下は編み上げの革製ブーツで固めるといった「和洋折衷」の女学生スタイルは、精神における「和魂洋才」を具現化するものであり、また、遠くからでも識別できるそのファッションは、「普通の女の子」ではないという特権性を彼女らに与えていた。

しかし女学生の異形性やノイズ性を強調したのはファッションだけではなかった。女学生は、メディアの中にスキヤング的な言説とともに誇張され、さらにその存在性を特化させていく。つまり「墮落女学生」というイメージの流通によって女学生は男性の性的対象という新たな意味を加えられ、普通の女子から意味的にも區別されていくのである。

稲垣恭子によれば、女学生に関する風評の多くは、男性読者の興味をひくために捏造されたものが多かったという。<sup>(4)</sup> センセーショナルな話題に飢えた読者を満足させるための捏造や憶測が、メディアを介して跋扈する状況は、昨今の週刊誌やテレビワイドショーで取り上げられる「女子高生」ブームなどに照らし合わせても充分理解できよう。

女学生の墮落報道は、明治三十五年の夏頃において急に宣伝されはじめた現象であることを岩田秀行は指摘している。そのきっかけは、「四ツ目屋事件」にあっ

た。「四ツ目屋事件」とは、明治三十五年四月に高等女学校の国語読本の中の『都の手ぶり』に四ツ目屋の淫業の条りが掲載されて問題となった事件のことである。この事件が引き金となり、「女学生の墮落の現況(女子教育家の注意を促す)」「読売」明治三十五年六月二十七日、「汽車の窓より我子を筑摩川に投棄つ(女学生墮落の結果)」、女学生墮落の呼声盛んなる今日」(『読売』同年八月一日)「女学生腐敗の真相」(『二六新報』同年八月二十三日から十一月九日・五十九回連載)、「ここにも一人墮落女学生の標本」(『読売』同年十月五日)など、女学生バッシング報道が過熱する<sup>5)</sup>。

こうした報道の大部分は、実際とはほど遠い読者の好奇心を煽るためのゴシップ記事の類であった。だが、その後、新聞紙面において用意される『魔風恋風』や小栗風葉の『青春』(明治三十八年三月五日から七月十五日)「春」『読売新聞』、明治三十八年七月十六日から明治三十九年一月一日「夏」同、明治三十九年一月十日から十一月十二日「秋」同といった「女学生もの」の創意や人物造型に関するイメージの源泉となったことはいまでもない。

『魔風恋風』の掲載を予告する『読売新聞』明治三十六年二月十一日には、「(天外)曰く明らかに写真主義の本領を発揮して、世間非写真主義者に向かつて一大鉄槌を下し、併せて其反省を求むる所あらんとすと」と、この新連載の新聞小説が真実に基づいた「写真小説」であることが強調され、三面記事との連続性とモデルの实在性を匂わせている。

新聞や雑誌などのメディアを通じて報告される女学生の墮落は、女学教育において推進されてきた「良妻賢母」思想とは裏腹な、スキャンダラスで性的に解放された対象として女学生に新たな意味を加えていく。三面記事や新聞小説で反復流布される女学生の風俗は、主人公を単なる作中人物という設定から、女学生の鏡像として意味づけられていくのである。

### 三 新聞小説

日本における新聞小説の発生を遡れば、「殺人事件などの判決公判を、そのまま

報道したのでは当時の読者が理解しにくい、というので、実話話に書きかえて、数日もしくは十数日にわたって連載した、いわば、新聞報道のひとつの手段が、やがてフィクションにふくらんで小説風のものとなり、通俗小説になっていった」ものだ<sup>6)</sup>。高木健夫は『新聞小説史 明治編』のなかで述べている。新聞小説の書き手にしても、小説家が登用される以前は新聞記者が兼ねているのが普通であった。明治初期には戯作者が記者となり、雑報も小説も書いていたというのが実状であったのだ。

こうしてみると、モデルの实在性を強調し、虚実の混同を誘った天外の目論見は、新聞小説の発生からすればしごく当然のものであったといえよう。通俗的な雑報記事に慣れ親しんでいた読者は、小説という形式においても、同様の価値を求めており、より刺激的な娯楽の対象として受容したのである。

それまでの報道とも創作とも区別がつかない続き物を整理して、創意のある「小説」の掲載を主張し、新聞に雑報記事と独立した「小説欄」を設けることを提言したのは坪内逍遙であったが、新聞小説の性格については次のように述べている。

- 第一 小説にも当世の事情を報道する意を含ませ、成るべく当世を本尊とし現在の人情、風俗又傾き等を示すべし。
- 第二 誰が見ても同感し得るべき事、さなくとも多数の人に解る事、即ち楽屋落ちにならぬやうにすべし。
- 第三 親子兄弟並びて読むとも差支へなきやうに。
- 第四 過去の事又未来の事を種とせば成るべく当世と異なる点を今の人に知らしむるやうに。
- 第五 所詮、娯しまむると同時に当世の有様を報道するか、然らざれば多少教へ導く心ありし<sup>7)</sup>。

報道と創作とを区別すべきだと主張した逍遙であるが、「当世の事情を報道する意を含ませ、成るべく当世を本尊とし現在の人情、風俗又傾き等を示すべし」というところに、当時の新聞小説をめぐる諸関係、すなわち社会、作者、メディア、読

者という多層的な受容関係を垣間見ることができる。「当世を本尊」とすることは、つまり雑報記事にみられる報道性を小説内部に持ち込むことを意味し、それは必然的にモデル小説であることが、新聞小説の規範となることが示唆されているのである。したがって、逍遙のいう報道と創作の区別は、形式上の問題にすぎない。それゆえ、天外が紅葉に反旗を翻し、『金色夜叉』を凌駕する意志をもって書いた『魔風恋風』とは、まさしく三面記事に向けられた読者の好奇心や劣情を、新聞小説の枠組みの中へと誘い込み、同時代のコンテクストに往還させようとするものであったのである。

こうした小説と読者との相補的な関係は、小説内部に散りばめられた記号としてのモノの多さによって具体化されている。都市化によって産声をあげた明治末期の消費社会の中で、田中康夫『なんとなくクリスタル』のようにモノと人との結びつきを強調することで、物語に信憑性とアクチュアリティが付与されているのである。記号の多いことを示す例として、主人公が登場する冒頭の有名な場面を振り返ってみよう。

その日は「帝国女子学院」の創立十周年の祝賀会には皇后陛下下の行啓が予定されており、「東洋屈指の大学校」の正面門の周りには無数の群衆が取り囲んでいる。そこへ主人公の女学生が自転車にのって颯爽と登場する(図④)。

鈴の音高く、見られたのはすらりとした肩の滑り、デードン色の自転車に海老茶の袴、髪は結流しにして、白リボン清く、着物は矢絣の風通、袖長ければ風に靡いて、色美しく品高き十八九の令嬢である。

両側に列ぶ幾万の目は、只だ此の自転車を逐うて輝くのであるが、令嬢は学校に急ぐためか、夫れとも群衆の前を羞かしいのか、切りとペダルを強く踏んで、坂を登れば一直線に、傍目も触らず正門を指して駆付けんとすると、今も腕車を曳込んだ雑踏の間から、向ふ側に移らんとしたらしく、二人の書生が不意に躍出した。

曲角の出合頭、互に避る暇もない。後なる書生に自転車衝突つたと思ふ間も無く、令嬢は横様に八九尺も彼方に投げられ、書生は仰向きに其処に倒れたの

である。

「デードン色の自転車(流行アイテム)」「海老茶の袴(ファッション)」「結流し(ヘアースタイル)」「白リボン(ファッション)」「矢絣(ファッション)」。こうした「女学生的なる記号」を誇示しながら主人公は女学校の校門へとペダルを踏んでいく。

その様子は、『女学世界』三十五年四月号の巻頭口絵(武内圭舟筆「花ふぶき」)を再現し、反復するかのような颯爽とした場面である。けれども、『魔風恋風』の主人公は、次の瞬間、見物人の書生との接触によって転倒し、「彼方に投げ」だされる。自転車で跨る女学生という構図は性的隠喩でもあろうか。そして自転車からの転倒は、主人公の墮落を冒頭のシーンにおいて予見させるものであったにちがいない。

#### 四 挿 絵

連載という形式は、新聞小説の創意に少なからず影響を与えている。続き物であるということは、文学的作品の質よりも、話の臨場感や読者の興味を惹きつける工夫が必要となり、そのためには新聞が更新される毎に、読者の心理を掴み、山場を持って終わらせることが必要となる。つまり、次はどうなるのだろうかという期待を持たせて章を閉じるのが新聞小説の常套手段なのである。今まさに話題となっている事件や事物を物語に取り入れることは、読者のテクストへの参入度を高めるためには重要な要素であり、事実の物語化によって、小説内部の出来事がもつとらしく響けば響くほど、読者とメディアとの間に共感覚が生まれるのである。

また、新聞という媒体は、ニュース記事、雑報、広告などがモザイク状に錯綜する言説空間であるため、新聞小説は「外部」の影響から逃れることはできない。モザイク状の陳述形式を採用する新聞は、線形的な読みを強制する刊本の世界とは根本的に異なる受容態度を読者に求めている。小説の内部に現れた商品(記号)は、新聞広告に反復され、外部における他の視覚表象と共鳴し合い、再び新聞

小説の内部に環流していく。つまり新聞の読者は、記事、広告、新聞小説を一覽的に受容することになる。『魔風恋風』のトポスとは常に多声的であるといわねばならない。

菅聡子は新聞小説を特長づける要素として挿絵に着目し、読者の能動的な参与もたらず例として、「入院料」の章における主人公の着替えの場面の挿絵を挙げている(図⑤)。菅は語り手の視点や作中人物の視点、挿絵の構図によって読者の視点へ重ねられることを指摘する。「読者の視点もまた、初野の裸体に向けられる語り手の視点に重ねられている。なぜなら新聞の連載分では、乳房を露わにした初野の立ち姿の挿絵は、はつきりと読者の方を向いているからだ。新聞の三段ぬきの挿絵は、読者に向き合うことによって逆に読者の視線のありどころを規定する」

菅によれば、新聞小説の読者とは「窃視をする読者」ということになる。読者は、窃視を許された者であり、語り手の共犯者である。事実、『魔風恋風』の物語において、作中人物の殿井や下宿屋の主婦と一緒に、読者は女学生の私室に忍び込み、押入の中を覗き見て、好奇心の赴くまま私信を開封する現場に覗き見的に立ち会うことになる。(三月八日 第四其の室(一))

芝居の舞台での様子を垣間見る観客のように読者は不可視であるが、登場人がどこにも描かれていないその視覚は、読者を瞬間にして窃視の主体へと転じさせる。加えて、「女学生」を取り巻いている社会的言説がスキヤングラスであるが為に、そこには女学生(主人公)のことさら強調された「聖性」を暴こうとする心理が、現実と虚構の区別を問題とせずに重ねられていく。

菅は「日々断片的な情報として伝えられてきた女学生の(墮落)という醜聞が一貫した物語として展開される。新聞小説としての『魔風恋風』の成功はこの読者の関心をとらえた時点ですでに約束されていた」と結んでいる。

しかし、この程度の裸体挿絵は、『女学世界』の「家庭生活」の中の挿絵(明治三十七年一月号)にも見られるものであり、また窃視の共犯者となる読者を男性だけに限定してしまうのは無理がある(図⑥)。「読売新聞」の読者のどの程度の割合が女性であったかは分からないが、読者投稿欄である「ハガキ集」には、女性と思われる投稿も多数あり、裸体挿絵に対する嫌悪感や性的興味といった反応は掲載さ

れていない。

読売新聞の新聞小説に挿絵が添えられたのは、明治二十八年一月一日から連載された尾崎紅葉の「不言不語」が最初であったという。この挿絵の導入は社内から反発があり一回限りに終わったが、他紙が挿絵の人気で発行部数を伸ばしていることから、同年五月一日から連載された田山花袋「笛吹川」に挿絵が添えられることになる。

新聞小説への挿絵の導入は、毎日更新される絵巻物のようなものへとその性格を変えていく。映画のない時代であったから、今日でいうところの昼の連続テレビドラマに近い役割を担うことになったのだろう。そう考えると、窃視的欲望を喚起させたということよりも、問うべきは、読者が読むよりも前に挿絵に目を奪われという受容のあり方の変化である。読者は読むよりもまず、挿絵を見、その場面の前後を想像しながら、昨日の話と今日の話を結びつける。線形的な読みを強いるテキストは、挿絵の後に受容されざるを得ない。

挿絵からテキストという受容の順番は、読み進めなければ何も分からない刊本化された小説とは根本的に異なるものである。新聞小説の読者は、この回の物語のクライマックス場面をあらかじめ知っている者となり、それがまた作品と読者との共犯関係を強めていく要因にもなる。つまり作中人物たちの知らない事態を、予め知ってしまうことで、語り手と読者が同位相に立つことができるのである。

何にも増して挿絵は「テキストに忠実であらねばならない」と太田三郎は述べている。しかし「単に逐次的に、文字の外形をそのまますつかり絵画の外形に移すと云つたやうな無意義な忠実さを意味するのではない」と付言し、テーマの把握に努め作者の意図を理解し、批判し、絵画的機能を吟味して、「テキストの効果をより有機的に強調せしめる」ことを挿絵の役割だとする。<sup>10)</sup>

テキストによって強調された主人公の聖性は、挿絵の視覚的イメージとの相乗効果によって女学生の理想像をつくり出す。しかし、三面記事で伝えられる墮落女学生との落差によって、その反作用として墮落が期待されることになる。聖性は暴露され、悲劇に終わる運命があらかじめ宿命づけられることになる。

尾崎士郎の『明治墮落女学生』<sup>11)</sup>には、『魔風恋風』の挿絵との連関が描かれてい

て興味深い。主人公の女学生が男からのラブレターを繰り返し読み、机の上に置くとうとしたとき、折りたたんであった読売新聞の一面に掲載されていた『魔風恋風』の挿絵がふと目に入る。「挿絵を見つめているうちに、美代は小さく描かれている二人の男女が、次第に自分と松井のやうに思はれてきた」と語り手はいう。ここでは『魔風恋風』の挿絵による視覚イメージが虚構を現実<sup>12</sup>に結びつける媒介として機能したことが確認できる。

『魔風恋風』が未曾有の大流行をみせた要因について、真鍋正宏は小説の「劇化」、すなわち演劇との相互作用を挙げている。(明治三十八年三月、「東京座」において新歌舞伎として初演された。)真鍋によれば、小説内において「登場人物の会話を盗み聞く」「立ち聞きをする」という場面では、演劇の手法である「ドラマチック・アイロニー」の効果がすでに演劇に先行して試みられているという。「この時、読者は彼ら登場人物の会話を盗み聞く。すなわち立ち聞きをする。そのため、読者だけがこの初野自身の立ち聞きの実事を知ることになる。ここに、演劇に多用される、ドラマチック・アイロニーの典型的な手法の効果が浮かび上がってくる。そこでは、観客の方が劇中人物より多くの情報をもっている、劇中人物の台詞に、当事者以上に観客の方がハラハラさせられる。」真鍋によれば、流行小説における語りの構造には演劇の手法が利用されているという。

しかし、そうした手法は、挿絵画家が描く場面設定に関しても同様であると思われる。毎回本文に添えられる挿絵には、その章におけるある場面が具体的な視覚表象として提示されているが、その場面の選択は、まさしく出来事が生起する契機であったり、次の展開が期待される動的な場面であったりするのである。

演劇的效果という観点からすれば、新聞挿絵の構図は、確かに舞台で展開する一場面のような印象を受けなくもない。だがよく見れば、むしろ半古が描く挿絵は、物語の瞬間を切り取ったといった方がびつたりとくる。それは舞台の場面のような静的な構図ではなく、前後の時間の流れを感じさせる途中経過のごとき映像であり、写真経験への連関性を感じさせるものだ。

確かに、新聞小説の読者の読みは、先行する演劇、歌舞伎や新派劇の受容経験を解説コードとすることで成立するものだろう。しかし、遠近法が援用された構図を

基本としながらも、建物や人物が半身に切り取られたり、空間のトリミングが強調されたりする半古の挿絵には、カメラアイ的な効果を見出すことが可能であり、また観察者の「視る欲望」を強く誘発するものになっている。演劇などの「見栄」を真似た構図が多用された『金色夜叉』の挿絵と『魔風恋風』の挿絵は、一見同じような挿絵に見えるが、そこには表現上のある種の断絶があるのでないだろうか。

##### 五 「ハガキ集」と広告欄

新聞というメディアの特徴は、その形式の「一覽性」にある。新聞は一般に活字メディアのごとくイメージされるが、線形的読みから逃れることのできない書物とは異なり、ひとつの單元において線形的であっても、紙面全体においてはモザイク状を成し、どの單元から読んでも差し支えない構造をとる。

そうした断片的な形式である新聞が読者の前に置かれた場合、読者の眼差しは第一に大きなポイントの題字や見出しに向けられるのが普通である。したがって、見出しのような大きな活字は、読むというよりも見るといった方がよい。挿絵がある場合は、まずもつて眼差しは挿絵に向けられていく。無論、挿絵は見るものである。つまり強調された大きな文字や挿絵を混在させる新聞というメディアは、活字メディアと呼ぶよりも、視覚メディアと呼んだ方がよりそのメディアの性格に合致している。

また新聞には報道記事が日々更新されているが、その記事となった出来事は、日常世界で直接的に経験されるものではなく、テキストによる二次的受容経験である点も見逃せない。つまり、同一紙面上に掲載される連載小説は、いわば日常世界と同位相に埋め込まれた「もうひとつの現実」という性格を帯びやすくなるのである。社会的言説と小説の言説がトポジカルな意味で混濁する新聞紙面は、その内容の類縁性が高くなればなるほど、日常世界の出来事と物語世界で起きる出来事との差異は、文体の違いでしかなくなっていく。

こうした経験位相の混濁は、読者投稿欄として設けられた「ハガキ集」によってさらにその度合いを進めていく。物語世界と読者の日常世界を結びつぐためには、

記事だけでなく、読者が能動的に紙面に参加する仕組みが求められる。それが読者投稿欄である「ハガキ集」の役割である。すなわち、開かれた言説空間である「ハガキ集」において、読者は、現実と虚構を意図的に綯い交ぜにし、テキストの享受者からテキストの生産者へと立場を変えていくのである。

この「ハガキ集」に寄せられた投書には、最初は、作者に関するもの、作中人物に関するものが多かったが、次第に、実在の女学生に関するもの、「当世百人娘」に関するものが目立つようになる。そして、誰かの投稿に対する反論や共感などの様々な意見が続々と寄せられることで、テキストをめぐる「読者共同体」が形成されていくのである。無論、編集者によって選択された投稿であるから、すべての投稿を読者が書いたものと判断するのは難しいし、また、話題作りのための加筆もあっただろう。しかし、意図的であれ、意図的でないにせよ、そこには虚構と現実の区別はさほど大きな問題とされないトポスが生成されていた様子を伺い知ることができる。作品ならびに女学生に関連する投稿は、連載期間中、ほぼ毎日にわたり掲載されており、紙面で見ると、その読者共同体は大きな広がりを見せている。以下にそのごく一部を抜粋してみた。

二月二六日

▲天外君の魔風恋風出たさすが第一回に於て自転車上の美人を現出したのはもう明日が待たれる、所で形見の弊は柳浪君お得意のいよいよ立消えですね(なにがし)

二月二八日

▲心もとなく待つて居た天外さんの魔風恋風第二回まで拝読しましたさすがに先生だけあつて、筆おこしの巧妙なるには感服しました兎に角そのなり行きを楽しんで居ます(小説好生)

三月八日

▲魔風恋風は日毎日毎に面白くなりて実に翌日が待遠でたまりませんですから記者病氣本日休載など言ふ語の出ぬ様に願ひます、天外君よ若しそんな事があると僕には実につかりするばかりで無く僕の知る友人もがつかりするよ、序に天外君よ『二人みなし』の後篇はどうしました(神田願望生)

三月一日

▲天外君！魔風恋風は面白く拝読しますしかし毎日掲載の分量が少ないので何だか物足りない様な気がする何卒今一ト奮発して紙面の許す限りせめても一段も多しして貰ひ度いものです、お願ひだ！

三月三日

▲十人十色と云ふから新聞掲載の小説に就て読者から種々な注文の出るのも無理のない事だが小生は天外君の小説の出たため再び読売新聞の読者となつたのだ文学趣味の低い者は此も彼も所謂恋愛文学と謂ふだらうが日本一の文学新聞なる読売の読者諸君は宜敷作の展開を待つべしだ(八重垣生)

三月一六日

▲佳人初野が負傷は上腕骨外科頸の骨折なりといへば言ふまでもなく其手は肘関節を九十度の屈位に於て擔布もて首より保持されてあるべきにかの半古君の挿画の如く直下せしめおくは終生の奇形となるべしアア(一匙庵)

三月二〇日

▲天外さん、御願ですから萩原さんを墮落させないで頂戴な、私だんだん嫌気がさして来たわ、ね、ちよいと、よくつて？私本当に心配なの、(女子学院同級生)

三月二一日

▲婦人服改良論が盛であつた頃女学生間に筒袖が大変流行して同時に男書生に長袖が流行したつげが此頃はまた女学生の袴が長くなつて男書生の袴が短くなつた併し三田の某塾のは皆コスメチックでテカテカして居る(一往一来)

三月二七日

▲僕の下宿の隣に某女学校の校長の邸がある、多くの女学生を邸内に置いて監督をして居るのださうで時々八釜しく騒がれて随分困るのだが、殊に先夜の如きは三十幾人の女学生に男の声もして十二時過ぐるまで笑ふ、歌ふ、踊る、拍手する、その騒ぎといつたら実に言語道断で、眠りもならず、勉強は無論出来ず、此頃試験中の僕等は非常に困らせられた、主人は例の事件で拘留中とのこと(蓬萊山人)

▲魔風恋風も次第に面白相だがあの殿井と云ふ奴は丁度僕のやうな男と見へる僕もこの秋からは東京へ出る筈だが女学生の諸君は随分御用心なさらぬと危険だよ(地)



## 方風俗生)

三月二十八日

▲余の女学生を嫌ふ理由を数ふれば外面に白粉を飾り視線の達せざる部分は垢だらけなること其の一。非常に間食を好むこと其の二。若き紳士を視る時いやな目附をすること其の三。これを要するに今の女学生の品性は、下宿屋のおさんと比較して姉たりがたく妹たりがたし。噫！（白堂）

四月二日

▲今の女学生の傍若無人の振舞には殆ど閉口するよ其の一二の例を挙げれば（一）人の家を覗込むこと（二）触れてならぬものに触れること（三）案内の任などに当るものは時に意外の赤面をせねばならぬことがある（法也生）

四月八日

▲日本橋の何店とか申す所を通りますと三四人の女学生が子供を遊ばせ各々袖の中より菓子を出して食べながら私等や他の人の姿を見ては互に耳打ちして大きな声を出し指差して種々の悪口を申して居り升よ実に今の女学生程阿婆擦者はありません（日々通勤女子）

四月一〇日

▲東吾さんと芳江さんとは一緒にさせて下さいな今日の話だとなんだか東吾様がマレーヂを拒むだけだわ、芳江さんも不幸な人ねえ序に伺ひますが萩原さんの病氣は如何ですか永く休むと操行点に關係しますよ（友人桃江）

四月十一日

▲生は世の中に嫌ひな者が沢山あるが女学生程嫌ひな者はない、何故なれば第一生意気で人の中で出来もしない英語をペラペラ饒舌り、人を見下げ白粉を塗り、肩を怒らして歩き座る事はしないで寝転ぶ、如彼人を妻に持つ紳士は余程要人しないといけませんよ（晩学生）

四月十二日

▲此頃は上野や向島には花盛りだ、東吾の君も両手に花と云ふお安くはない品物を控へて居ますぜ、ほんやりしてゐると魔風と云ふ恐しい風にはばらばらと吹き飛ばされよ、東吾君しつかりとやり給へ若し君が此の花を己がものとせんでではだめだよ

## (春駒生)

四月十三日

▲やいやい殿井の色餓鬼野郎何人の許可を得て己が所の可愛初野を引張込だ、人が見えぬ風をして居ると思つて馬鹿にするない（助公）

四月十五日

▲晩学兄には今の女学生を憎しむ事頗なりされど兄の云ふ如く天下の女学生滔々皆取るに足らざる怠惰者なりや生意気者なりや乞ふ寸の暗黒面を見て尺の光明界を迄否認する事勿れ（鎌倉生）

▲近頃女学生に対して非常に悪口をいふ人たちが出て来たがあれは女生があまり潔白で墮落せる彼等の口車に乗らぬのであらう（天声）

▲一昨日小石川橋上を十四歳位の愛らしき少女が垂髪に夏帽を被り改良服に海老茶袴と云ふ扮装で太く逞しき馬に打乗り巧みに馬を馭しながら後より来る阿母さんらしき洋装の婦人人も騎馬にてさも愉快さうに談笑しつつ通行するのを見たが自転車乗りのハイカラ式部も是を見ては顔色なした（みやこ）

四月十七日

▲自転車に乗る人を厭ひ女学生を忌むは一種の嫉妬心に過ぎないと想ふ何方も多少ハイカラ的なるは免れないが決して文明的でない事はない、両者よ常に慎重の態度を取らんには彼等の非難はなからん（同情生）

四月二〇日

▲晩学君が女学生を生意気と云ふのは無理はない君の住む二三丁先に或る家がある其所に二人娘があるけれど皆女学生だ実に君の云ふ如き女だ（ヒナ生）

▲天外さん初野さんを苦しめるのは大概にして頂戴よ昔から美人は薄命のものとは云ひながら妾し初野さんの境涯を察すると耐らなくなるは今日も波ちゃんに会ふ処の一節を読んで妾し母と二人で泣いてよ（駒込すみれ子）

四月二十五日

▲初野と吉兵衛との争にて大に感動した僕は隣に父が情欲を制する能はざる為めに丁度萩原家の如き家庭を作り出した家がありますが何も知らざる子供の真情は実に悲惨のものである嗚呼不健全なる家庭にある少女程可憐のものはあるまいと思ふ僕

もお波嬢に同情の念溢るる斗りだ(上州の青年)

四月二十六日

▲女学生は一方に於て墮落したかどうか知らんが又他方に於ては中々進化した所が見える、第一その髪飾に就て彼等は大苦心のもので洗ひ晒せる髪を束ぬるにも経営惨憺殊にその簪リボン等に於て認むるハイカラ的なるは実に二十世紀的女性として目するに足るものだ(ヒドク崇拜生)

▲近頃の葉がき集では魔風恋風の初野に同情を寄せるものが多いやうですが初野以上に憐れなものは乱りがましい殆ど言語道断な風習を以て自ら足れりとして居る不潔な女生徒の間に僅に認められる泥中の清い蓮の花のそれら破廉恥の人等の為に打消されて仕舞ふ事です(なに子)

五月一六日

▲葉書集全廃すべし此頃はヤレ初野嬢だとか東吾の君だのと云つて大事な欄を閉げるのは実に遺憾だ公徳上或は実業上有益なる記事のみを掲載せざる以上は此欄を全廃せよ(志練生)

五月二〇日

▲るび茶の袴といふと芸者より墮落したもののやうに云つて居ります。さうでせう随分往来を歩くと紅粉翠黛で盛んに恋を談じて行くのがあるのね(洗ひ髪)

▲魔風恋風よりも新らしき家の方が派手だ、然るに読者も貴社新聞も之を冷遇するものの如し前者の賛辞はその辺に止めて今度はこの評をしゃやうぢやないか(さる人)

五月二二日

▲葉書集全廃す可しと叫んだ志練生よ足下はこの欄の如何に興味あるかを解せぬ野人だ読者が初野嬢に同情ある言を寄せるのが気に入らぬなら宜しく講読を止めよ(浪華にて郷月)

五月二二日

▲当世百人娘は明治の令嬢に反して一層多方面になつたのは嬉しい殊に江戸式なる日本橋的女性を紹介するに到つてはなほ更に愉快に愛読する(抜衣紋子)

▲百人娘!不完全な日本の木版画の肖像ではいかな美人も醜婦に見えます、否あ

れでみんな本文の告げるやうに美人ですか疑はしい(逆光線生)

五月二五日

▲百人娘は東京の如き隣人も知らぬ処にては最も便利で若き男女を持てる親共は何に時期を捉へるならん僕も今年外国に渡航して商業を試みると欲する希望を持つるものだが独立不羈沈重にして冒険の精神に富める婦人を得る事は出来ぬか知らん珂々(望富生)

▲当世百人娘誠に面白く毎朝拝見仕居候御社探偵眼の性格なる今更には無之候が感謝罷在候尚ほ此上欲を申せば肖像の画法はモ一少し超凡に願ひ度候(きよ子)

▲女学生が墮落するのは女学生自身の罪といふより周囲の境遇が悪いからだ方今殿井的のハイカラ書生が到る処女学生をつけねらつてゐる僕はコノ小説を読んで一大教訓を得た天外先生シツカリたのむぜ(遠慮無用生)

五月二八日

▲当世百人娘は綿上の華だが何だか余り煮え切らない書き方ですね「と云ふ事だ」  
「との評判」「近所の噂」なぞは有難くない(竹露庵)

▲百人娘ますます面白し、要するに山の手の令嬢は田舎者なり向後弥江戸的なる美人を紹介せられや(結綿生)

▲当世百人娘もいいがあれでは困りますのね下町のお嬢さん方は丸で芸者見たやうでソレは粹かも知れませんが高等な所は少しも見えやしないわ妾は矢張「明治の令嬢」の筆法と方針を採りますよ(ゑび子)

六月一日

▲百人娘も好いが僕等には些も趣味を感じないナ矢張洗ひ髪をリボンに結んで袴の裾を一寸持つてツカツカ大股に歩くヒロインの方が頼もしい(書生)

六月二日

▲初野嬢は近來少しく変になつて馬鹿殿井を好む様になつて来た、余は恐る此の小説は天外氏の先著はやりうたの如く初野嬢が墮落せざるかをそして若し初野嬢が墮落すれば余は天外氏を人類の仲間位置かず又同時に読売新聞を読まずと決心した(心配生)

六月二三日

▲上野の図書館に殆んど毎日自転車で通ふ女学生がある、あの下髪の場合中々優美ぢや、僕は見る度毎に初野嬢のことを思ひ出す御氣を附けなさい人込の所へ行くのは初野さんの様に自転車からおちると悪いから（心痛生）

六月二四日

▲きのふ初野さんではしたたか泣かせられました、何と云ふ薄命な方でせう天外さんもいい加減にして下さいな私昨夜余り心配してそれはそれは恐ろしい夢をみました東吾様もゆるしてやつて下さいまし（熱心女）

▲妾は口惜しくつてよ、女学生はやれどうの、こうのつて……真個に一寸したことでも、直ぐかれこれ云はれるんですもの、一人がさうだから皆がさうだと云へないわ、男の方だつて、やれ大学だの何んのかつて大きな事ばかり云つて居る人が家ではランプ外ではテニスに狂つて机の上には新聞紙に雑誌ばかり教科書なんかは隅の方に小さくなつて居るんですもの……世間ではこんなものを矯正しないで妾等ばかりを……それは偏頗と云ふもんだわ（あさひ子）

七月二日

▲連日の百人娘、何れもお綺麗な方計りだが、惜い事には、誰方も年不相応に老けてお出の様で、十八の新造が二十六七の中年増に見える事がある、まさか老けて見えるお方計りを選た訳でも有るまい大方肖像の写しが悪いのでせうから諸令嬢に代りて謹でも少し若々しく、切めて年相応には見える様に写して貰ひたい存じます（青葉若葉）

七月三日

▲当世百人娘よき御考案毎日楽しみに拝見致します尚ほ望むらくは二十歳以上の娘をも御掲載被下ませんか実際それによりて得る利益は寧ろ十五才十六才の人より多かるべしと存じます若それによりて家庭の愛花を得ることもあらば実に幸福と思います（和以敬生）

▲初野嬢と芳江嬢の今後の運命は如何になり行くにやと考へ来れば余は心緒九回するアア愛の神よ恋の神よ希くは作家先生の枕神に立つて此の後両嬢を苦しめぬ様になさしめ給へ（トナリの男）

七月八日

▲ちよいと読売の記者さん今御披露中の百人娘さんが終つたらこんどは殿方の中で秀才の方々を掲載して頂戴な姫方の中々興が深いけど……殿方の方も……あら美男子なんて言はしないわ、いやな人だわねえ……（女学生）

最後に、『魔風恋風』の連載期間における『読売新聞』紙上の「広告欄」について簡単に述べておきたい。連載期間において、何らかの関連があると思われる広告を拾い出してみると、「自転車」「化粧品」「香水」「日用品」「婦人薬」「女学校の学生募集」などが散見できる（図⑧）。しかし、それらはごく一般的な新聞広告の体裁をとっており、連載小説との直接的な連関性を認めることは難しい。つまり、広告の表現に、『魔風恋風』の内容とリンクし、相乗効果を狙った意図が見られないのである。

しかしながら、先に見たように、「ハガキ集」には女学生の投稿と思われる投稿が数多く寄せられており、社会に急増した女学生が『読売新聞』の読者層の一角を担っていたことは間違いない<sup>13)</sup>。広告の表現に『魔風恋風』の影響が見られないのは、おそらく、存在としては目立っていた女学生たちであるが、まだまだ消費者としては未成熟なのであり、広告の直接的な訴求対象ではなかったからである。

誤解を恐れずにいえば、広告的であったのは、むしろ新聞広告欄よりも、テキストそのものであったのである。『魔風恋風』の刊本化の折には、女学生雑誌の代表である博文館の『女学世界』（明治三十七年一月一日号）に、以下のようなコピーと共に出版広告が出稿されている（図⑨）。

▲魔風恋風 は写実小説なり恋愛小説なり明治文壇未曾有の大作なり

▲魔風恋風 は女学生界の写生画なり活きたる明治の風俗志なり

▲魔風恋風の文章は一句一辞悉く良金美玉なり言文一致の文章軌範なり

▲魔風恋風の会話は現代新言語の蓄音機なり言語に意を用る者の参考書也

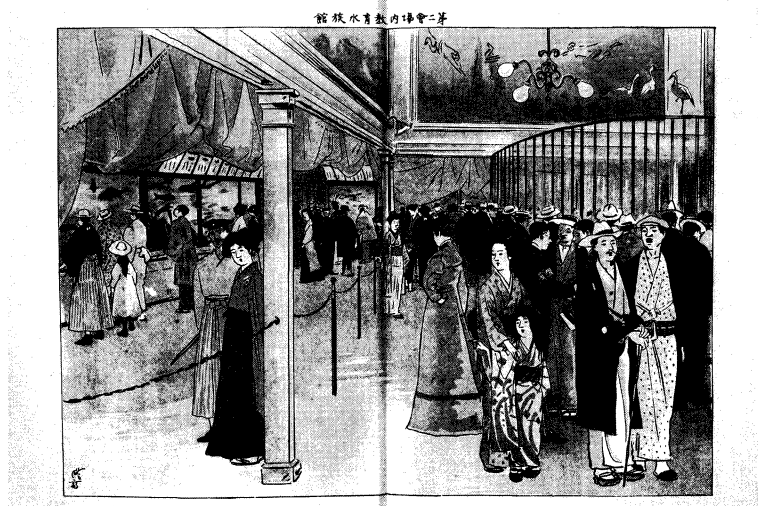
▲魔風恋風は無限の詩趣に富んで内に深奥の理想を寓す甚だ庭の読書家に適す<sup>14)</sup>

小説内容そのものが、「女学生界の写生画」であり、「会話は現代新言語の蓄音機」、「参考書」であると主張するこの出版広告は、『魔風恋風』がいかにトレンドイであるかを扇動的に主張している。すなわち、明治三十年代において最もオシヤレで、最も新しい小説が『魔風恋風』だったのであり、その悲劇の主人公は、読者自身の分身だったのである。「開かれた小説」として『魔風恋風』を再読すれば、消費の記号にあふれたテキスト自体が、作者の意図を越えて、まさしく「広告」的な役割を果たしていたといえるのではないだろうか。

## 注

- (1) マーシャル・マクルーハン『メディア論』みすず書房 一九八七年
- (2) 小杉天外『魔風恋風』春陽堂 明治三十六年
- (3) 本田和子『女学生の系譜 彩色される明治』青土社 一九九〇年七月
- (4) 稲垣恭子『明治の「墮落」女学生』(柴野昌山編『文化伝達の社会学』世界思想社 二〇〇一年五月 所収)
- (5) 岩田秀行「海老茶式部」攷 あるいは川柳的視点による明治三十年代女学生論」国文学 言語と文芸 八六号 昭和五十三年六月 大塚国語国文学会 所収)
- (6) 高木健夫『新聞小説史 明治編』国書刊行会 昭和四十九年
- (7) 坪内逍遙「新聞紙の小説」『読売新聞』明治二十三年一月十七、十八日所載 逍遙選集 別冊第三
- (8) 田中康夫『なんとなくクリスタル』河出書房新社 一九八一年一月
- (9) 菅聡子『メディアの時代 明治文学をめぐる状況』双文社出版二〇〇一年十一月
- (10) 太田三郎他『挿絵の描き方』崇文堂 昭和九年五月
- (11) 尾崎士郎『明治墮落女学生』新潮社 昭和三十年十月
- (12) 真鍋正宏『ベストセラーのゆくえ 明治大正の流行小説』翰林書房 二〇〇〇年二月
- (13) 高等女学校の学生数は明治二十年代には公立・私立学校がほぼ同数ずつ、合わせて三千人程度であったが、『高等女学校会』が公布される明治三十二年には総数九千人弱となった。それが明治三十四年には一万七千人、三十六年には二万五千人、四十年には四万人、明治末年には七万五千人という数に達している。
- (14) 『女学世界』第四卷 博文館 明治三十七年 一月一日号 広告

参考資料



▲図①：『風俗画報』（明治四十年六月二十五日）に描かれた海老茶袴の女学生。



▲図②：『風俗画報』（明治三十七年一月一日）に描かれたハイカラ女学生。



▲図③：絵はがきにあらわれた自転車にのる女学生。（ポーラ文化研究所編『幕末明治美人帖』新人物往来社 平成十三年三月より）



▲図④：『読売新聞』（明治三十六年二月二十五日）、『魔風恋風』挿絵（梶田半古）より。



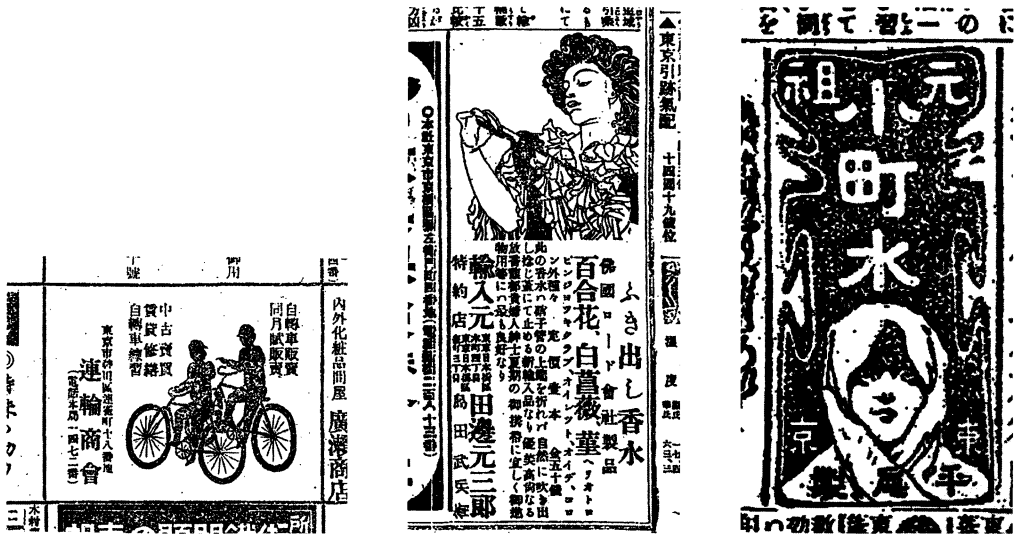
▲図⑤：『読売新聞』（明治三十六年三月十四日）、『魔風恋風』挿絵（梶田半古）より。



▲図⑥：『女学世界』（明治三十七年一月号）挿絵（作者不詳）より。



▲図⑦：『読売新聞』「当世百人娘」（作者不詳）より。おそらく肖像写真からトレースしたものでしょう。



▲図⑧：連載期間における『読売新聞』の広告の一例。



▲図⑨：『女学世界』第四巻 博文館 明治三十七年一月一日号より。

### A novel and a reader, consideration of relations in the media

BABA Nobuhiko

**Abstract :** The research on “makazekoikaze” in a study of Japanese literature has been substantially made from two aspects. The one is to think about its contents as a best seller novel in the Meiji era. The other is to consider the social background of “a girl student” in the era. However, a conventional study method is fraught with danger to miss the essence of “makazekoikaze”.

Needless to say, this novel was a serial story in a newspaper, and it was made updated every day in the media of a newspaper. There were various general news, articles and advertisements around the story. Therefore the each text of a serial story in a newspaper is what is produced everyday newly.

This report does not assume “makazekoikaze” to be an independent novel. My purpose is to examine the media where a novel appeared and the influence with the context around the newspaper.